

2016/2/1

しろひげ@Kurobane です。

2月になりました。

冬将軍の到着が例年になくぐずぐずしていると、半ば嬉しく、半ば不安な思いで過ごすうちに、大寒を過ぎると、一刷毛で天気図は恐ろしげに変わり、冬の縦縞が並びました。

おまけに、南岸低気圧とかいう耳慣れぬ名がつく、将軍さまの吐く息は、九州や西日本の景色を真っ白にし、「何年ぶり」という修飾語が目立つようになりました。

思えば、雨や風に対する受け止め方は、日本中そう違うはずがありません。たとえば、10ミリの雨は、どこに降っても”10ミリ”だろうし、5メートルの風もしかりです。

しかし、雪は暖地なら、＜雪国にごめん都の3センチ＞（朝日新聞川柳蘭）のように数センチでニュースになります。

雪国に住む私には、この程度のならチリが舞ったほどしかあるまいに、とテレビ画面を観ながら苦笑しています。

古典を紐解いても、江戸に住む芭蕉は＜いざさらば雪見にころぶところまで＞と、雪で童心に帰ります。

片や雪国の一茶は「白いものがちらちらすれば、村人たちは、悪いものが降る、寒いものが降るとののしりあう」と雪をおぞましいものと書いています。彼には＜雪ちるやおどけも言えぬ信濃空＞という句もありました。

南北に長く、山脈で東西を分ける日本列島の冬は、雪の受け止めかたでも昔から異なっていたようです。

かくして、除雪で出来た、私のところの駐車場の雪山もあつという間に大きくなりました。

2月 は雪国の寒の底、この雪山の高さで、早春への距離を思う日々がしばらく続きそうです。

もうひと辛抱、ふた辛抱の毎日、どうぞ息災にお過ごしください。

黒羽根整形外科
黒羽根洋司